

トキタ種苗、葉物
気温40度でも

野菜、暑さ・病気に負けない品種開発

野菜や果物などが天候不順で不作となり、品不足となったり価格が高騰したりするケースが近年目立ってきた。消費者への安定供給という喫緊の課題のなかで求められるのが、高温や病害に耐性がある品種だ。変色の少ないトマト、黒い斑点のないニンジン……。種苗会社などで品種の開発が進んできた。

2月上旬、国内最大の卸売市場である大田市場(東京・大田)で「品種見本市」が開かれた。農作物の種子を生産・開発する全国の種苗メーカー13社をはじめ、産地や卸会社、外食企業などの関係者約300人が参加。種苗メーカーはそれぞれの最新品種を展示し、特徴などをブースに訪れた人に説明していた。

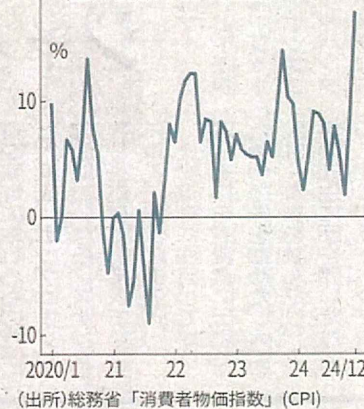


黄変果が少ない「桃太郎ブライト」は開発に約10年を要した(写真左)。「灼熱サラダ菜っば」は気温40度前後でも栽培できる



タキイ種苗、変色少ないトマト

食材価格は上昇基調で推移
(生鮮食品の前年比上昇率)



ヤベツは昨秋ごろから高値が続ぎ、2月上旬時点でも2倍超えた。

卸の東京青果(東京・大田)の担当者は「産地では対応が追いつかなくなっている」と話す。

「桃太郎トマト」シリーズを手掛けるタキイ種苗(京都市)は、24年に「桃太郎ブライト」を発表した。冬から夏前まで収穫できるトマトの品種で、熊本県や北海道などの主力産地で導入されている。

開発に約10年を要したこの品種の特徴は「黄変果」が少ない点だ。春先の気温が高いと、トマトの果の上部が黄色く変色しやすい。出荷量の減少や等級の低下につながる。大田市場の仲卸でトマトを扱う担当者は「黄変果はなかなかなくならない」と話す。そのほか、課題に新品種で応える。トキタ種苗(さいたま市)が開発した「灼熱(しやくねつ)サラダ菜っば」は、気温がセ氏40度前後でも栽培できる。国内では20年から販売している。

青果育種研究会(東京・目黒)の阿比留みどり

専務理事は「品種開発は10年単位で時間がかかる」と指摘する。気温の上昇や異常気象は今後も続く見込みで、将来を見据えながらのさらなる品種開発の必要性は増しそうだ。農産物の安定供給に向け、産地や種苗会社、市場などサプライチェーン全体での取り組みが続く見通しだ。

(杵淵純平)